

# 慰霊の旅編

時を超え、故郷を離れ、家族の最期の場所に降り立った日のこと。

## 遺児を導いた英霊 ―戦友慰霊の旅で・中国

松阪市飯南町 上山 門次郎

昭和十七（一九四二）年二月十日豊橋六十二部隊に入隊し中国の娘子関に入営。十八年六月天動工兵隊（工兵二十七連隊）に転勤。十九年四月二十日、華南作戦に従軍。五月漢口。六月湖南作戦に従軍。八月十日茶陵縣に到着後、四力月間作戦に参加した。

その間、栄養失調や回虫症により毎日二十人から二十五人が次々に戦病死した。その一人に子供四人を残して出征した初年兵（注・一年目の兵隊）で福井県高浜町出身の森本茂夫さんが赤痢を発病した。薬品在庫まったくなく、補給なしの過酷な状態の中、食事はおも湯だけ、葉のかわりに消炎の粉を飲まされるのみで何の手当も出来ないまま、一日一日と衰弱し、畑の中の一軒屋に隔離され、四力月後に孤独で哀れな最期を迎えました。

きつと会いに来るから」と別れを告げ、心に誓いを立てました。その後八力月各地を転戦し、終戦を迎えました。五月十日、慰霊巡拝のため四十六年ぶりに、英霊の長男森本正次さんほか四十名で当地を訪ねました。私が埋葬した方向がこちらだと説明すると、森本さんは無言で反対の方向へ何かにとりつかれた様に一人黙々と進んで行くのです。ある地点に達すると、「私はここまででよいです」と立ち止まりました。埋葬したのはここではないと色々と話し合っていたら、近くの民家から年配の中国人が現れ、「何しに来たのか」とたずねられて事情を話すと、「昔私の家がこのにあり、日本の兵隊さんが病で寝かされていた」と話してくれたのです。

遺児の森本さんは現地は初めてであり、私がそちらの方向ではないと二回

も制止したのにも無言で言う事も聞かず、お父さんが亡くなられた場所に到達出来たのは、まったくの驚きでした。霊の存在を改めて意識し、全員で涙し、慰霊を行いました。

私も現在八十六歳となり、健康に少し自信が無くなりつつあります。全国の戦友と続けて来ましたが英霊顕彰、追悼慰霊祭もいつまで続ける事が出来る

かわかりませんが、体が持つかぎり続けてまいりたいと思っています。

戦争の話をするとうるさくなつた多くの戦友を想い、過酷で愚かな戦いを呪い、涙が止まりません。今の日本の平和は三百万人とも言われる国民の犠牲の上に成り立っている事を決して忘れる事なく語り続けなくてはならないと思っています。

## 戦後の思い出 ―ビルマ慰霊

いなべ市員弁町 太田 秀子

昭和十九（一九四四）年六月三十日主人応召、久居三十三連隊に入隊のため見送りに行きました。その年は、雨が少なく、五、六月からカンカン照りで、田植えも出来ない状況でした。

しかも自然流水利用のため、朝早くから鋤簾（じょれん）や土箕を持って、川原小僧よろしく水路を守りましたが、

一雨くると元の木阿弥となり、「賽の河原」の繰り返してました。女の細腕でコツコツやるのですが、他家の水がかりの良い田圃を羨ましく思いました。また流れる汗を拭う間もなく畑の草取りに夏の日など午後八時頃の薄暗くなるまで頑張りました。

暗くなりトポトポと帰りますと、「今

頃までうろろして居る」と叱られたものです。そのときは他に話す人もなく、ただ情けなくて一人で泣きました。思えば、その頃は若さのお陰でこれといった病気にもかからず、ガムシヤラに働くだけでした。今になってそのツケが脚・腰に回って来たのか思うように動かせせん。

昭和五十四（一九七九）年三月、初めて主人の亡くなった土地をこの目で確かめたく、日本遺族会のビルマ（現ミャンマー）慰霊団に参加しました。

主人の部隊名も分からず、ただ「昭和二十年三月十日マンダレーに於いて戦死」と云う公報にあったのでその旨申し上げて参加致しました。いま一心に残るのは、実父が後二、三日の命でしたが、別れの言葉と五十数年の苦労と面倒を掛けたことへのお礼やらを言つて「帰つたらいろいろと話すから……」と後ろ髪を引かれる思いで出発したことでした。

帰つたら既に天上の人となつておられました。何と親不孝な娘であつたと今も悔やまれてなりません。

その後、「五一会」の戦友のお骨折りにより、今では「五一会九中隊の遺族」として丁重にもてなしをして頂いています。また二回目のビルマ慰霊には、九中隊の方々から多くのご支援を頂いて参加しました。巡礼の感慨を述べます。

現地は夜も日本の土用の日中の様な暑さで、オンボロ車数台に分乗してサガンヒルに向かいました。途中エンジンがオーバーヒートすると釣瓶にて井戸より水を汲み上げて車に入れて走るので。日本では考えられないことです。やっと目的地に着きました。

境内へは、裸足でなければ入れないのです。どんな偉い方でもすべてその様にするのでさうです。これには一行も困りましたが一念発起して頂上の仏様の所までたどりつきました。案内者の指差される方向に合掌し、夫やそれぞれの身内の方々の名を呼びあつて涙を流しました。私はマンダレーでしたので皆様と一緒に合掌してお念仏を唱えました。

マンダレーでは、戦時中に連隊本部が置かれていた所に風呂敷を敷いて、員弁町の玉菱のお酒、タバコ、油で揚げた力キモチを大きな缶につめて、又、日本の土地でなければ咲かないだろうと思われれる水仙、白百合、椿、牡丹、菊等の造花を大事に途中こわれない様に注意して持参しました。懐かしい変わらぬ我が家と、孫三人のお雛様と家族一同が、そして家の前から眺める藤原岳のいつもと変わらぬ美しい姿の写真をお供え致しました。静かに臉を閉じて在りし日のことなどを話し合おうとするのですが、万感胸にせまう言葉にならず、滂沱（ばうた）として流

れる涙でその場に泣き伏してしましました。どれ程の時が経ったか、ふと我に還つてお参りをしたのでした。でも私は何て幸せだろう。主人の亡くなつた地で直接お参りできるなんて……他の方々に申し訳なく思いました。

パガンではイラワジ川原で慰霊しました。四国の青年は、父の出征時には母の胎内だったさうです。その母の心尽くしの品物を供えながら、こみ上げてくる感情を押さえることが出来ず、対岸はるかに向かつて「お父さん遅くなつたけど会いに来たよう」血筋は争えず亡き父を思う慟哭に参列者一同声を上げて泣きました。往時を顧みて、戦後教育のあり方を問い直し、主人や多くのご英霊をお慰めする縁にしたいと思いました。

阪神淡路大震災の時のあの惨状をテ

## わたしの見た南太平洋

### ブーゲンビル島・ニューブリテン島ラバウル

名張市 杉本 栄三

私はこの度、戦没者遺児による慰霊友好親善事業の一環として、東部ニューギニア地域参加者の一人として、三重県から二人参加させていただきまし

レビ、ラジオで見聞きして、その直前の私宅の火災の様子を彷彿とさせ、身につまされる思いでした。寒さに向かうときでもあり、主人の関係の方々はじめ、多くの皆さんからの物心両面にわたる温かいご支援を賜りましたことに感泣しながら再起を図りました。ありがとございました。

先年、主人の「五十回忌法要」を営みました。遺影もなく残念でしたが、後日古いアルバムにあつたからと主人が写っている写真を持って来てくださった方があり、それを我が家のお守りとして子孫に語り伝えていく所存です。朝な夕なに合掌して、身の健康と平和を祈念し、主人の霊と共に「誉れの家」として恥ずかしくない様護つて行きたいと思えます。

父は亡き母との新婚生活十五日にて、陸軍野戦高射砲第四十一大隊に召集され、パプアニューギニア・ブーゲンビル島にて、昭和十九（一九四四）年八月二十五日、米軍の猛爆を受けて同島

で戦死しています。

私はかねてから厚生労働省に父の戦死地である同島への慰霊墓参を陳情してきましたが、銅山の採掘にからむ部族間の紛争で入島することができず、六十有余年を経て本年部族間の和解が成立、初めて外国人（日本人）の入島が許可されたということで、慰霊訪問が実現しました。

私たちは、ブーゲンビル島、ブカ島、ラバウルでの地区慰霊を行いました。最後にラバウルで東部ニューギニア全戦没者の追悼式を行いました。各人が父の戦死地で追悼の辞を述べ献花しました。

私は父の戦死地ブーゲンビル島で次のような言葉を父に捧げました。

「杉本保内様、私はあなたの息子ですよ。あなたは、ご存じでしょうか。一人息子が生まれていました。母はあなたの生存を確信していましたが、私もまたあなたが帰ってくるものと信じていました。母は十年前、他界しましたが、今はお父さんと一緒でしょうね。一人息子の私は既に六十三歳となっております。私もまもなく父母の御元に行く年齢となりました。大東亜戦争の終結から六十有余年、日本は戦争のない平和な国家になりましたが、世界では今も戦争や内乱、テロ、貧困、飢餓等で多くの人々が苦しんでいます。私は母一人、子一人で育ちましたが、母のお陰

で大学を卒業し役所に勤務、定年退職となり現在、恩給の身です。良き妻に

も恵まれ、長男、三男は、県立学校に奉職、次男は役所に勤務しています。私は留吉じいさん、里つばあさん、母

まさを知っています。皆さん元気ですか。子供たちも婚期の時期となりました。良縁が授かるよう力を貸して下さい。母も役目を果たし、杉本家をつ

ないでくれました。息子にも孫にもおじいちゃんのお父さんは、戦争でパプアニューギニアの南の島、このブーゲンビル島で戦死したことを語り継いでいくことを約束してお別れの言葉とい

たします。あなたのことは、決して忘れません。安らかに眠ってください。

以上がわたしの追悼文の要旨です。他県からきた人も順次追悼の辞を述べましたが、すべての人に共通していることは、父の顔を知らないこと、母一人子一人で戦後を生き抜いてきたこと

でした。父の顔を知らない遺児がその父に語りかける言葉に、同じ立場の遺児仲間

はみんなもらい泣きしてしまいました。日本軍はブーゲンビル島へ十八万人が出兵し、十五万人が戦死したそうです。ラバウルは、緑の多い綺麗な街でした。火山があるので、温泉もあるが、高温でとても入浴できません。滑走路の一端にマトピット火山（日本名、花吹山）があり、今も噴火が続いていま

す。

かつて、零戦が並んでいた飛行場は、今は緑に覆われエアニューギニアのジェット機が並んでいました。

ラバウルには、多くの壕があり、いままも日本軍の戦車と高射機閉銃が錆びたまま放置されていました。防空壕で空腹とマラリヤで自決した兵隊も多いと聞いて胸が痛みました。

山本五十六連合艦隊司令長官が居た防空壕は、人間が二人は入れる程度の大ささで階段を下りると、白い壁の作戦会議室があり、入ると二丁三分で汗ビツヨリでした。

山本長官は、昭和十八（一九四三）年四月十八日ブーゲンビル島視察のため五機の護衛機と共にラバウル空港を飛び立ちました。この情報は既に米軍に解読され、十六機の米戦闘機（ロッキードP38ライトニング戦闘機）により、撃墜されています。

椰子の木のジャングルを入ると、一式陸上攻撃機、九六式あるいは九七式の単座戦闘機の白い錆びた残骸があり、胸が痛みました。

海岸沿いの山や丘には幾つもの洞窟があり、食糧などの戦略物資の貯蔵用に使っていたとのことですが、米軍の潜水艦攻撃により物資は届かなかったということ。茶色いクレインの残骸がありました

が、これは戦史にも残る有名なクレ

ンで、日本軍がシンガポールから運んだものとのこと。ラバウルの戦争博物館には、日本軍の九四式戦車、野砲、九三式酸素魚雷、米軍のB17爆撃機、コルセア戦闘機、そして当時の帝国海軍が誇った零戦が置かれています。

生々しい遺品を見て、私は戦史を知らない自分を悲しく思いました。

パプアニューギニアの国旗は、南十字星と極楽鳥です。「最後の秘境」「地上最後の楽園」と表現されるだけのこととはある島です。私には太平洋戦争の激戦地であったパプアニューギニアがかくも親日的で暖かい人々のまなざしで迎えてくれるのか、不思議でなりません。

東部ニューギニア地域慰霊友好親善に参加したことで、私の心の中の戦争が一つ終わった感じ。これからは、父の分まで生きぬき、このような悲惨な戦争を二度と繰り返すことのないよう、日本の進路を厳しく見守って行くのが私たち戦争遺児の使命とと思っています。

# モンゴル、シベリアでの遺骨収集

伊勢市 築山 新生

平成六（一九九四）年から始まったモンゴルでの遺骨収集事業に参加するよう、日本遺族会から要請が来た。終戦後、この国へは一万三千八百名の日本人が連行され、木材の伐採、建築用煉瓦製造、そして建設、農耕などの労働を課せられた。

首都ウランバートルは人口六十万。七〜八階建てのアパートが林立し、政府の建物は、町の中心であるスフートル広場付近に集中している。道路は広く、日本車は少なく、ロシア車が目立って多い。伝統的なモンゴル人の住居「ゲル」（簡易テント）も郊外で見られた。若い人は、日本人と顔つきも似て、流行の服を着ている。老人は、古来の袖の長い服を着て、腹に太い帯を巻き、皮の長靴をはいている。

ロシアとの国境の町スフバートルから南に鉄道が延び、ウランバートルから東へ、そして中国へと走っている。その沿線の十六カ所に、日本人埋葬地が点在しており、約千六百名の方が眠っていた。五年間で、そのうちの千五百柱を祖国に迎えた。埋葬地は記録に残っているが、炎天下の草原での発掘作業を、モンゴル人の人夫と共に行う。地下数十センチから、深い所は一メー

トル以上掘らなければならない。

最初の地ナライハは、団員九名で作業を行った。ご遺骨十一柱は、柩に納められて、衣類、靴も着用していた。近くの炭坑での事故の犠牲者である。他の埋葬地のご遺骨は、裸体で埋葬されたのか、遺留品は発見されなかった。

ご遺骨には、一柱毎番号をつけ、一片の骨も残さずに土を落し、きれいに拭いて白布の袋に納めた。発掘中のご遺骨の中に、一本、二本の金歯が美しく輝き、悲しみが込みあげてくる。

「遅くなりましたが、海、山を越えはるばる日本からあなた方を、お迎えにまいりました。一緒に祖国へ帰りましょう」と、一柱一柱に語りかけながら毎日の作業を進めた。埋葬地の草原は、色とりどりの花が咲き乱れ、一面のお花畑で、「異国の丘」のメロディーが思い出された。ダンバダルジャー墓地は、まさに歌詞のとおりだった。

一年の約半分は凍りつく土地で、ご遺骨に傷みはなく、指の先まで収骨が出来た。日を改めて焼骨を行った。一柱毎に鉄板の上に木を組み、ご遺骨を並べて点火すると、炎と共に上る煙は、東方（日本）へと流れていく。この焼骨式では、黙禱、国家斉唱、「ふるさと」

を歌い、抑留経験者の方は、軍隊式の儀式を行う。涙、涙の焼骨式である。毎回、最後にダンバダルジャー墓地で、日本国大使、モンゴル政府役人、赤十字総裁、参加団員が出席して追悼式を実施した。

シベリアでの収集事業は、第二シベリア鉄道（バム鉄道）沿線の村々で実施した。熊や狼が出てきそうなシベリアのタイガの森は、粘土質の土で、掘っているとすぐに水が湧いてくる。発掘したご遺骨は傷みがひどく、今にも土に帰ろうとしている。もっと早く来てあげればよかったと思う。

バイカル湖に源を発するアンガラ川が流れる河畔のホテルに一夜をとる。ごうごうと大きな音をたてて貨物列車が、対岸を走って来る。数えてみるとなんと二百輜も連結していた。この町から列車でタイシエツトに向かう。一昼夜の旅である。

二回目は、ハバロフスクからアムール河を渡り、シベリアの森、そして大草原を実に七十五時間、三昼夜かけイルクーツクまで四千キロメートルに及ぶ鉄道の旅となった。こうなったのは、イルクーツク空港で起きた航空機墜落事故が原因だった。前年も、この年も、この地での収集は、埋葬地が集落に近く、平地で交通の便も良かった。もっと条件が悪く重機も必要との話も聞いていたのだが、その必要はなかった。

ロシア人の人夫と、スコップでの手掘りで作業を進めたが、この地の埋葬地は盗掘の跡があり、聞いたところでは金歯を狙ったらしい。

三回目はチタへ派遣された。今回も二日間の鉄道の旅になった。この地は条件が悪く、作業が過酷な上、脳炎ダニが多く棲息しているから注意するよう聞かされて現地に入った。宿舍、食事はまずまずだったが、水に苦労した。風呂は無く、ロシア人の銭湯に入った。村長宅のサウナを利用してもらう。便所の水も少なく、バケツに確保しなければ毎日の生活も出来ない、日本で自由に水を使用していたのとは大違いだった。

宿舍から現地までの道路が悪く、四駆の車だがいつ転覆してもおかしくない。でも疲れている時は、眠る事が出来た。途中で冷たい水の流れの川で休息した。ここの埋葬地は、モリブデン鉱山の跡地で、車を降りた場所から急斜面を百メートル位下る。今まで経験した事のない条件の悪さで、石がいっぱいの急斜面での作業を身体のバランスを保ちながら行った。作業終了後、道路に出ると岩の間から清水が流れている。人夫が樋（とい）をつけてくれて水を汲み、身体を洗った。お茶やコーヒー用に、ボトル二本に水を入れて宿舍に持ち帰る。休日なしの収骨作業は、今までで一番つらく苦しかったが、

ロシア人の人夫はよく働いてくれた。力も強く、たのもしい助っ人だった。

私が最後に訪れた年は、港町ウラジオストツクだった。市外地にある墓地は大きく広く、その一隅に日本人墓地があった。水が湧き出す墓地を掘れども、ご遺骨が出て来ない。三日目にやっとご遺骨を探しあてた。水で洗い、土を落しよく見ると外人らしい。過去の経験から日本とは骨格が異なる。顔

の彫りの深さ、足の骨の長さで判断する。八柱発掘したが、現地の火葬場に預け、収骨作業を終了した。宿舍のホテル、食堂での昼・夕食は、シベリアで最高であった。帰国の日、日本領事館で昼食にカレーライスをご馳走になった。

平成六年から九回参加したが、毎年参加者が無事故で帰国出来たのは、ご英霊のご加護と感謝している。

## 父の思い出と鹿児島知覧慰霊の旅

いなべ市大安町 二宮 敬

そうです。

部隊で初めての戦死者となったと部隊長より手紙を頂きました。

遺骨遺品は全部手元に帰って来て、津の県庁で遺骨を受け取り、村葬までして頂いた事が幼な心に残っています。

四百五十名が鯖江に入隊し、員弁から八名の方々は全員戦死され終戦後四十八名の方が復員された事を厚生省で調べ、部隊長に父の戦死した時の事を知りたくて手紙を出したところ、戦友会「サルミ会」を作っている事がわかりました。員弁から四名の遺児が仲間入りをさせて頂き、毎年会合に参加さ

せてもらい、色々の話を聞く事が出来ました。

今、父も生きていると九十九歳になつているので戦友の方も高齢で亡くなられ、昨年二人だけになられてサルミ会も解散したことは残念です。

父の顔もはつきり知りません。思い出は河原へ魚を獲りに行ったり、メジロを県知事の許可を受けて飼っていたし、又射撃が出来て郡では毎年優勝し、県大会でも勝ち全国大会で二度一等地になったメダルが今も仏壇の中に入っており、在郷軍人会より自分が使用する鉄砲を預かり、毎朝手入れをしている姿を思い出します。

知覧慰霊の旅は毎年遺族会の方々より要望が多く、平成十八年十一月に計画しましたところ、百十余名の参加を頂き実施致しました。

館内での展示物の中には、地元より特攻隊で出撃された方もあり、特別に説明を受けて全員で涙を流しながら遺書を拝見しました。

弱冠十八歳、十九歳の少年兵が書いた「再会は靖国神社で会いましょう」との文章に小泉前総理が感動され、総理在任中毎年参拝して頂いたのだと思えます。

バスガイドさんも特攻隊の説明をして頂き、ガイドをしているうちは特攻隊の遺書を読んだり説明をすると言ってくれて、力強く感じました。

知覧では、三重県から十八名の方が出撃戦死されております。

また資料館の近くに、特攻隊のお母さんとして、出撃前夜に最後の食事を作り食べさせて下さった鳥浜とめさんの食堂へ足を運びました。とめさんのお孫さんが語り部として、語り継いで下っている姿を拝見、言葉の中に祖母の語りを一生続けて行きますと言ってくれて感動しました。霧島神宮で知覧鹿屋の特別攻撃隊の慰霊を昇殿参拝で行なつて帰りました。

話は変わりますが、私にとって遺族会との関わりは、昭和三十五（一九六〇）年頃より遺族会遺児の会発足に先がけ全国研修会が行なわれ、紀伊長島の鮎田様、亀山の川戸様、四日市の山本様と四人で出席したのが始まりでした。

私は平成五（一九九三）年より、員弁地区遺族会の事務局として、平成七年に「員弁郡遺族会五十年史」を発刊。同十一（一九九九）年には「恒久平和を願つて戦語り部」も作成し、郡内の遺族会会員や当時の県遺族会の役員・評議員、地元員弁郡内全小中学校へ配布させて頂いたほか、小学校の戦語り部として私の知っている事を聞いてもらつております。今後も遺族会の一員としてがんばるつもりです。

伊勢市 古川 哲

大東亜共栄圏の名のもとに日本帝国主義が世界に挑んだ、無謀な太平洋戦争ではあったが、多くの兵士がお国の為に散り果てた。私の兄も歴戦の十六師団（京都、福知山、久居）比島派遣軍垣第六五五部隊の一員として、レイテ島の警備に配属された現役の歩兵だった。強力な戦力の米軍を迎え撃つて勇戦敢闘したが、武運つたなくレイテの山野を血に染めて殉じた。生還した戦友も無く、その最後も明らかではない。昭和十九（一九四四）年十月二十七日の戦死となっている。二十五歳だった。

平成十八（二〇〇六）年二月、慰霊巡拝団に参加し、フィリピンのレイテ島を訪れた二日目の十字架山の慰霊を



平和の塔 1977年7月建立垣兵団生存者

終え、ブラウエンの部落に於ける慰霊祭で、そこに現存する碑が垣兵団のものである事を知った。予期せぬ偶然に兄の霊が呼び寄せたかと、激戦地の土を踏みしめて亡兄の霊に追悼の辞を捧げた。その時の震える感情を生涯忘れる事は出来ない。遠く離れたレイテ島でさまざま兄の霊を、ブラウエン周辺の小石とレイテ湾の砂に寄せ、一緒に日本に帰還させて供養し、戦後六十一年の念願をかなえて、ようやく肩の荷を降ろすことができた。

ブラウエンの碑が、垣部隊のものであることは遺族会も承知していなかった様子なので、後日の為に碑に刻まれた「平和の塔」の文面と所在地を記載する。

いをこめて弔魂の誠を捧げると共に、悠久の平和を祈念してこの塔を建立するものである。  
1977年7月 垣兵団生存者

建立地名  
Santol, Maghbas,  
Burauen, Leyte

祖国の為とはいいながら戦い散った

## 忘れられない慰霊行ー西部ニューギニア

松阪市飯南町 水平 みね

私にとって最も思い出深い出来事は、三十余年前に父の眠る南の地を訪ねる慰霊行に、今は亡き夫と二人で参加させていただいたことです。初めての海外旅行でした。

父は昭和十八（一九四三）年九月八日、「十二日、福井県敦賀に入隊」と記された召集令状を受け取り、三日間の猶予しかない慌しい出征でした。その後一度の面会も出来ず、十二月末にようやく一通の葉書「西部ニューギニア、マノクワリにて」が届きました。

二通目は十九年六月に母宛に葉書が着きましたが、それは、土で汚れ辛じて読める程度でした。「祖父の祥月命日

数多くの英霊を想う。戦い止んで六十年、南国のレイテの島では今もなお、「山ゆかば 草むす屍」をスコールが洗い、慟哭の悲曲を奏でていであろう。散華した尊い兵士が、今の日本の平和を培ってくれた事を未来永劫に忘却してはならないと切に願ひ、戦争を知らない次世代の人々に寸毫の回想を記するものである。

（四月二日のこと）元気に御奉公している。家族の写真を送って欲しい。お母様、子供達を頼む。」とあったので早速私と妹が二人並んで写してもらったのを送りましたが、恐らく届かなかったと思います。

それっきり音信不通のまま終戦となりました。二十一年六月、ようやく南方からの復員船が来ましたが、父は、「十九年九月十八日西部ニューギニア、マノクワリ陸軍兵站病院にてマラリアで戦病死」との悲しい知らせでした。

それから二十六年、昭和四十七（一九七二）年八月二十六日から九月六日までの、社団法人南太平洋友好協会主

## 夫の戦地を訪ねてーガダルカナル

名張市 山岡 縫枝

跡に違いないと感じたとたん、思わず大きな声で、「お父さん、やっと逢いに来ました」と叫んでいました。あの感激は一生忘れないでしょう。

塔婆とローソクを立て、家から持つて行った水とお米を供えました。ここでもみんなで般若心経を唱えていただきました。日の沈むのが早く、帰り道は懐中電灯とローソクの光で山道を下りて来たことも忘れられない思い出です。

ソロンでは、小さな舟で波のしぶきにぬれながら塔婆を流した海上慰霊行でした。

最終はテルナテで、熔岩の山に松材の大供養塔を建立しました。塔婆を立て、お供え物とローソクの灯を供えたころには、現地の人々が多勢集まって来ました。きれいな夕陽を浴びての大法要でした。

あれから三十年余りの時が流れても、あの慰霊行の日々の感激は忘れられません。そして感謝の気持ちを忘れてはならないと思っています。あの時の皆様の温かいお心を。

今、遺族会を継承し「英霊顕彰並びに戦没者遺族の福祉増進」に努めることが残された私たちの責務と考えますと同時に、あの悲惨な戦争を繰り返すことのないよう戦争を知らない若い世代の人々に語り伝えることも、私達に課せられた大きな使命であると思えます。

光陰矢の如し、早やここに終戦六十年余の歳月が流れました。

結婚生活一年半余りの昭和十五（一九四〇）年五月十一日、夫は、生後八カ月の子供を置いて、赤紙の召集令状一枚で親戚や村民の皆様に見送られ出征しました。呉海兵団、海軍通信兵として入隊、直ちに支那事变に参戦、中国各地を転戦。更に大東亜戦争が昭和十六年十二月八日に勃発、西南太平洋の戦場に参加。第三高島丸に乗り組み、真珠湾攻撃の通信部隊に勤務していました。

戦争は徐々に烈しくなり、又転戦命令により、昭和十七年一月十五日、「南方に出陣するから十四日、呉駅へ面会にこられたし」との電報が来ました。主人の兄さんと水疱瘡に罹っていた長男と三人で呉駅へ面会に行きましたが、短い面会時間はあっという間に過ぎました。

主人は「海兵団に頭髪、爪等全部置いて来た。行く戦場は南方ニューギニア方面。陸戦隊で秘密だ」と言いながら一枚の写真を取り出して、此の写真を大切に保存する様にと渡してくれました。

子供の頭を撫で、「お利口にして立派

な人になるんだよ」

私には「子供を頼む、身体を大切に」との言葉を残して、足早に戻って行きました。さぞかし後髪を引かれる思いだったでしょう。帰りの車中で、これがともしれば親子、夫との最後の別れとなるのだろうかと思えば、胸がつまり、腹をえぐり取られる様な感じがしました。

両眼に涙があふれながらも、凜々しい海軍服の主人の姿が脳裏に焼きついて忘れる事が出来ません。

呉港出港以来、五カ月ぶりに夫から待ちに待った手紙が来ました。

「（注）月振に便船あると聞き、此の機を逸してはと、ペンを取りました。

当 落着いて丁度 月とても暑い大陸の気候だ。其の間訪れるものは敵の

ばかり。日本から持参の古雑誌は何回となく読み返されて、ボロボロになって居ても捨てはせず大切に持ち歩いて居ます。之を捨てることに依って内地とのつながりを失う様な気がするからです。

毎日多忙で真つ黒な 人の真つ只中に敵機の来襲を受け戦斗を続けている。戦争という言葉に負けては駄目。勝利の気持が特に必要だと思つ。

催による「戦跡を訪ねる旅」に参加させていただきました。西イリアンのピアク島、マノクワリ、ソロン、テルナテなど、訪ねた島々は空も海も碧く、夜空に南十字星がくつきりと見えたことを今も鮮明に覚えています。現地の人々は、私達を親切に迎えて下さり、遺骨収集の道案内や作業の手伝いもしていただきました。

最初に訪ねたピアク島は、海岸に近い山の岩肌に無数の砲弾の跡が残っていました。村の裏側の岩山には大小様々な洞窟があり、そこに眠っておられた数多くの英霊の遺骨を収集して、西の洞窟のそばで焼骨しました。僧侶の方々がお経を唱えて下さいました。

洞窟は広く薄暗い中に鉄かぶとや飯ごうなどの遺物が泥に埋まり、ドラム缶が何個も転がっていました。日本から運んで行った松材の大供養塔を建立して、塔婆とローソクを立てて万灯供養でした。みんな涙と汗でぐしゃぐしゃになりながら般若心経を唱えました。遺骨は、若い僧侶の胸に抱かれて帰国し、千鳥ヶ淵に納められました。

マノクワリでは、供養塔の慰霊法要の後、父の戦没地と知らされていた兵站病院跡へ連れて行っていただくことになりました。現地の方の道案内でジャングルの奥地へ入って行くと、やがて小川のせせらぎが聞こえる所に着き、とつさに「近くに水はあったのだ...」と思わず少し安心しました。ここが病院



呉出港以来の伸び放題に伸びた鬚、髪は相당한もので、真つ黒に日焼けした顔、僕の人相をすっかり変えてしまった。人相が悪くなった様だね。スゴイ鬚を見せてやる機会がないので残念だ。宏久が見たら泣き出すに違いない。父親の果たせなかつた望みを宏久に果たして貰いたい。こんなことを考えていると成長がいよいよ待ち遠しい。『這えば立て、立てば歩め』の諺通りだね。明るく、強く、正しく、のびのびとした子供に育ててくれ。

ただそれだけが念願だ。父はなくとも子は育つ感深くする。

顔わかぬ 父に便りを書くといふ

妻の便りを 微笑みて読む

便箋を線と丸にて うづめいし

吾子の便り いとほしきかな

が最後の手紙となりました。

主人の便りはいつも私と子供を思う気持ちがあふれていました。

昭和十八年十一月十六日、戦死公報が届きました。内容は「昭和十七年八月七日、ソロモン群島方面に於いて壮烈なる戦死を遂げられる」と記載されておりました。それ以来、主人の真実の戦死場所を追い求めたく四方八方尋ね回る事二十五年経過。昭和四十六年、厚生省から昭和二十年迄に海軍で死亡した方は調査を提出する様、私は市役所に勤めていました関係上、早速提出。調査の回答は「昭和十七年八月七日ガダルカナル島で壮烈な戦死を遂げら

れた。第八十四警備隊通信」でした。

その後、主人の当時の様子を知らずがかりを探していたとき、中京テレビで福島県の滝沢一郎さんがガダルカナル島から九死に一生を得て帰還された事を知り、滝沢さん宅に息子と二人で訪ね、当時の戦闘の状況をお話し頂き、昭和十七年八月七日午前五時、日本軍に向つて米軍の空海陸の総攻撃により全滅だったことを聞かされました。その時、来年は帰還した者達が三万三千余人の戦死者を残して帰りましたので慰霊巡拝を計画致しています。この事でしたので「是非、御一緒させて下さい」と依頼して帰りました。そのお陰で念願が叶い、昭和五十三年十月十日、ガダルカナル島より帰還した福島県の方たちと御一緒させて頂き、戦死場所慰霊供養して参りました。

各所に点在する激戦の跡で供養を済ませて帰宅致しました。とても親切な渡辺實様が尋ね人として戦死者住所、妻の住所、氏名等をソロモン誌に掲載して頂きましたため、五十七年一月元旦に届いた年賀状の中に、見知らぬ方の北海道菅原進様が主人の戦死場所を図面に書いて知らせて下さいました。

お陰様で、昭和五十七年三月十七日、二十六日、第二回目ガダルカナル島へ福島県の慰霊巡拝団に御一緒させて頂き、幸いに戦死場所も確認出来、ちようど主人の三十七回忌に当たる年、お陰様で念願が叶いました。

美しいサンゴ礁にヤシの緑映える南海の島、花に囲まれた楽園と澄み切つた空、年中花が絶えない、四十度の常夏だが海風が爽やかな気候ですが、実は悲しい思い出の島です。

祖国を離れ敵機の来襲を受け戦闘を続け、食糧も無く飢餓を凌いだ夫は、永遠の眠りを続けていますが、その霊はきつと祖国に帰つてくれていると信じています。

団長さんが、「山岡さんのご主人の通信隊は、ルンガ岬の近くに置かれていましたが、米軍が上陸、決戦状態になつて来たので三五高地に移り、そこで通信していたので砲撃や低空機銃掃射にやられ戦死された場所です」と教えて下さいました。

夫の最期を知りたい、その執念が生存戦友たちの記憶をきつと呼びさましてくれたのです、ここです。その時、断腸の想いで主人が戦つた大地に立つことが出来ました。「夫の血を吸い込んでいない土」だと思い、スコールの湿つた土に静座した時、なぜか温かなものを伝えてくる感じ、涙が泉の如く流れるばかり。慰霊巡拝団の皆様全員、山岡さん、ここに奥さんが迎えに来たよ。早く一緒に日本に帰りましょう」と四方に呼んで下さいました時、私は福島県の方々の温情と恐らくは夫の魂にも聞こえたであろう声の響きのなかで再び涙を抑えることが出来ませんでした。とうとう、お父さんが最後

に戦死した場所を尋ね当てましたよ。

お父さん四十年待ちに待ち焦がれたことでしょう。遅くなって申し訳ございません。姿なき姿、声なき声、今日の嬉しさ、よろこびを偲び面会。これが家の水、お茶、ご飯、赤飯、餅、お寿司、馬鈴薯の味噌汁、漬物、ぜんざい、煙草、酒、ビール、何より読書が大好きだった「文芸春秋」、「改造時局版」、「現代」、等々読んで下さい。貴男が私に残した宏久も、立派に育つて三重県立高等学校の先生です。教師で頑張つています。嫁も迎え、高校一年の孫娘と小学校四年の孫息子まであるのですよ。さあ、これが私達一家の写真です、御覧下さい。

お父さんお腹一杯食べて下さい。お酒やビールも飲んで好きな煙草も吸つて下さい。好きな馬鈴薯の味噌汁もお上り下さい。福島県の巡拝団の皆様々様にお礼を申し上げます。

今は亡き夫。されど、二人の心は一つである事を心にきざみ、合掌しました。

ガダルカナル島慰霊巡拝行は意義深い生涯忘れる事の出来ない鎮魂の巡拝でした。最後に言葉で表現することの出来ない苦難な茨の道でも、いつかは花咲き春は来るを人生訓として今日九十三歳迄生き抜いてまいりました。

【編集部注】戦地からの軍事郵便には、月日、部隊名、地名など具体的に記載することは禁じられ、「表現になっている。」



比島戦跡慰霊団に参加して

名張市 山崎 義文

出発の朝

待ちわびし 父を尋ねて幾千軒  
レイテにむかう 今日気持よ

第一日ルソン島

ゴミアファシヨ米軍墓地公園を尋ねてあ  
まりの立派さに

限りある 命捨てしは 国の為  
かくもへだたる 彼我の差よ

クラーク基地を前にして

奥深く 眠れる霊よ 安かれと  
行くてはがたし クラークの基地

二十一日

レイテ島レイテ海岸にて米軍上陸四十  
周年記念行事見聞

マルコス大統領、イメルダ夫人、米比  
軍司令官、日米両国大使出席

上陸作戦再現演習（実際は昭和五十九  
年十月二十日であったが台風の為一日  
延期し偶然其の現場に立会う好運の機  
会を得た。）

レイテ海岸にて、霊砂を求めて

米軍の 攻め来たる日 そのまゝに  
波静まりし レイテに立つ

比の入江 七百余隻が来しと云う

波治まりて 旭日に映ゆ

我が求む 父はいづくに倒れしぞ

レイテの土を しかと握りぬ

父よ叔父 共に歸らんおらが家

早く伝えん 待てる家内に

十月二十一日

慰霊碑巡拝 供物と湯茶を供えて

はるばると 持ち来りにし 好物に  
思ひ出されよ おのがふるさと

のみなれし 味忘れしか 四十の

年めぐり来し 我が井戸の水

団長を 導師に迎え 慰霊団

心で唱う 般若心経

ドラグにて現地人との交流

食堂で 会ひしドラグの 若人は  
手まねに答え サイン気安く

言の葉の 通せぬまゝに

寄り添つて

平和求めて 先づは乾杯

慰霊団 姿みとめて 寄り集う

現地の子等の 面やいとほし

はるばると 供物に持ち来し

チョコレート

子等に与えて 父やよろこぶ

レイテ戦唯一の傷跡第十六師団司令部

跡の三本の大木の株元が艦砲射撃によ  
り黒く焦げてこぶの様に巻込み再生の、  
息吹きが常夏四十年を経て唯一の生証  
人として君臨して居る

砲煙の 絶えて久しき 其の中に

今も鮮やか 株の古傷

十月二十二日

カリラヤ霊園にて、同行の比島で夫が  
戦死した女性の「あなたと一緒に帰りま  
しょうよ」のひとことこ

亡き夫に 帰りましようとして 語る妻

生けるが如く いたわりてなう

静寂の 中より出づる ひとことこが

嗚咽を誘う カリラヤの丘

海ゆかば 水づく屍と カリラヤに

ひときわ高く 霊にとゞかん

神棚に霊砂を供へて

父よ叔父 歸りしことは おらが家

永久に祀りて 安らぎを乞う

念願の レ島巡りを 終えし身は

よろこび満ちし 幸せの日よ

(註) 叔父(十六師) 垣第六五五部隊(歩

兵第三十三連隊) 昭和十九(一九四四)

年十月二十三日、パロ高地に於いて戦死。

父(一〇二師) 抜一二四二四部隊 昭和二

十(一九四五)年六月三十日、カンギボツ

ト山附近にて戦死。兄弟二人揃ってレイテ

に散る。